

研究主題

## 「授業の探究」

～価値あるものを自分事として学ぶ授業の創造～

### 1 研究主題について

#### (1) 研修主題への思い

令和2年度の研修は新型コロナウイルスの影響をまともに受けた。その一つとして、例年行ってきた「子どもの学びを語る会」において、教室の密集を防ぐため授業会場を分散させた。例年、大学教授を招聘してきたがそれもできなかった。

そこで本校における課題が見えた。授業会場を分散させることにより、多くの意見が出て、話しやすい雰囲気は生まれた。しかし、子どもの学びがどう深まったのかを視점에協議しているはずが、明確な子どもの姿として挙がらなかった。例年どこでどのように深まったのかは鹿毛先生や吉永先生から御教授いただいていた。それができなかったのも大きな要因である。また、子どもの学びの深まりを子どもの具体的な姿で捉えることも困難である。その困難さが浮き彫りになったのが、今年度であった。

私たちは、子どもが、新しい時代に必要となる資質・能力を「価値あるもの」としてきた。学習指導要領では、「何を知っているか」（コンテンツ、知識・内容）から「何ができるか」（コンピテンシー、資質・能力）、より詳しく言えば「どのような問題解決を現に成し遂げるか」へと転換している。また「自分事として学ぶ」とは、子どもが授業の中で身に付けた見方・考え方を他の授業やそれ以外の場面で働かせたとき、その見方・考え方のよさを実感する姿としている。私たちが目指すべき授業が学習指導要領の考え方に通じる普遍的なものであると言える。

令和3年度は、国が進めるGIGAスクール構想により、一人一台端末が実現する。このようなICT機器やデジタル教材の活用によって子ども主体の授業にさらに改善が図られる可能性が高まった。しかしICT機器やデジタル教材の活用が目的になってはいけない。あくまでICTはツールであり目的ではない。10年次の研修では、ICT機器を効果的に活用しながら「価値あるものを自分事として学ぶ」という資質・能力を育てる授業の創造に取り組んでいきたい。

### 2 研究課題

子どもの対話から学びを深める教師の出（ICT機器の効果的活用）

#### (1) 研究課題のとらえ

本校の授業を語る際に対話は欠かせないものである。どの教室においても子ども同士の対話する姿が見られ、子ども同士の対話の質の向上も見られる。しかし、ただ対話をしていれば勝手に学びが深まっていくものではない。

本校の課題としているのがその対話からどう学びを深めることができるかである。「可視化」「共有化」「焦点化」を視点として、「対話」に対してどのような教師の出（働きかけ）が子どもの学びを深めていくことができるのか研修を進めてきた。

では、どのような姿が子どもの学びが深まっている姿なのか。中央教育審議会（答申）では習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、

- ・知識を相互に関連付けてより深く理解する。
- ・情報を精査して考えを形成する
- ・問題を見いだして解決策を考える。
- ・思いや考えを基に創造することに向かうこと

を「深い学び」としている。いったん習得した知識やスキルを活用しながら他者と共に問題解決を行うことを通して、自分のものにしていくのである。このプロセスを吉永先生は無自覚から自覚化へと表現している。

本年度から、子どもたちに1人1台のタブレット端末を活用して日常的に授業を行うことができるようになった。新たな学校づくりに向かう学習環境の大きな変革である。1人1台端末はこれからの授業のマストアイテムと言われ、その活用による子どもの深い学びの実現に大きな期待が寄せられている。私たち教師にもその、積極的活用と活用能力の向上が求められる。

また、静岡県教育委員会から GIGA スクール構想(により1人1台端末)下における「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」調査研究事業の指定をよつば学府の2小1中学校で受けることになった。ICT 機器の効果的な活用に積極的に取り組み、その研究成果を県下の小中学校に発信していく責務を担うこととなった。

そこで、本年度の研究課題を「子どもの対話から学びを深める教師の出 (ICT 機器の効果的活用)」として、子どもたちの「対話」を「可視化」「共有化」「焦点化」するためのツールとして有効に活用し、学びを深める授業改善を研究していくこととする。

## (2) 具体化する手立て

### ① 具体的な子どもの姿で学びの深まりを捉える。

その教科でその単元または時間に子どもの学びが深まっている姿とはどういう姿なのかを授業者が捉える必要がある。それは子どもの表面的な表れではなく、子どもの思考の深まりである。子どもたちは教材の魅力があれば、他者や自己との対話を通して思考をくり返すはずである。その思考をくり返した結果、子どもにどのような変容が生まれるのかその姿を授業者自身が捉えた上で授業に臨みたい。

令和2年度の課題としてこの捉えの不十分さが浮き彫りになった。教材を研究する中でその教科で子どもたちはどのような「見方・考え方」を身に付けてきたのかを把握し、その単元やその時間における子どもに身に付けさせたい「見方・考え方」とは何かを研究していく。まさにその教科の本質を捉えることが求められる。そのために単元としての見方を高める必要があるだろう。その1時間だけでなく、単元を通じた教材研究を充実させていきたい。

令和3年度静岡県教育委員会から受ける指定研究も目的は子どもの学びの深まりである。すなわちこの学びの深まりを考えずして研究は成り立たない。ICTが独り歩きしICTの活用が目的となることは避けなければならない。

### ② 常に子どもの筋に添っているかを問う。

私たちは全ての子どもの立場に立つ授業を目指している。「全ての子どもが学びたいこと」だからこそ全ての子どもの学びが深まる。我々は教師の出を通して、その土台に全ての子どもをのせなければならない。だからこそ授業者は常に子どもの筋に添えているのかを問い続けていく。

### ③ 端末の操作に慣れる。

1人1台端末が日常的に活用できる学習環境は、子どもにとって教師にとっても初めての経験である。まずは、端末自体の操作、デジタル教科書やアプリケーションの機能を授業で活用することに取り組む。その中で、可視化、共有化、焦点化の視点から、どのような操作が、どのような提示の仕方が効果的かを探っていく。前述した単元構想の充実を図るのにも効果は期待できる。単元の流れを子どもと共有し単元の見通しをもつことでどんな力を付けていく必要があるのかを捉えることが可能となる。

### ④ 全ての教科で研究に取り組む。

窓口教科を設定せず、全ての教員が授業実践を通して研究に取り組む。教科における特性を意識し、効果的な活用方法を模索していく。

### ⑤ よつば学府研修主任会で学府として研修計画を立案する。

指標を設定し、成果を検証する。その指標は取り組みが進むにつれ変更もあり得る。成果としては子どもの学びが深まった姿が挙がるものと考えられる。

調査研究推進サポートチーム、静西教育事務所の指導助言、講師の招聘による指導計画を立てる。

### ⑥ 学府の推進計画を生かしながら、校内研修計画を立てる。

教員自身が ICT 機器に触れる経験が少なく、不透明な部分が多い。子どもとともにまず実践を重ねていくことで見えてくる部分もあるだろう。来年度の実践を通して、研修計画を構造化させていきたい。